

【書評】

岡部 光明著『大学生の品格—プリンストン流の教養24の指針—』

日本評論社, 2013年11月, 256頁

齋 藤 百合子

はじめに

本稿は、現役の大学生および大学教員、そして大学卒業生に読んでほしい本の1冊である、岡部光明氏が著した『大学生の品格—プリンストン流の教養24の指針—』(以下、『大学生の品格』)の書評である。

著者は、金融を専門とする経済学者であるが、これまで自身の専門的分野の研究論文や著書だけでなく、教育の理念や制度、研究方法など、教育分野に関する論文や研究ノート、などを現役の大学生や大学院生向けにも数多く発表してきた⁽¹⁾。これまでの著作の中で大学教員としての姿勢についての示唆も多々あった。大学教員には大学教育カリキュラムの中で専門性や業績が求められ、小中高校の教師が取得しなければならないような教員免許はない。それゆえ、教育方法や授業運営、服装や話し方から授業態度や学生へのルールに至るまで、大学教員たるもの、どのような姿勢で学生に接することが望ましいかなどの、大学教員としての自覚を促すアドバイスが文章のはしばしに記されている。それは例えば授業に臨む際の教員の服装や研究室での時間の使い方など、何気ない所作に表れている。大学生や大学院生に向けたメッセージとして記しながら、説教や教訓のような上からの教示ではなく、あくまで学生を共に育てていく仲間＝同僚へのメッセージとして記されてきた。本書は、学生を対象に、品位ある教養を身につけて未来を切り開き、創造して欲しいと誠実に願う著者の「インテグリティ(誠実さ)」

が込められた一冊となっている。

近年、文部科学省が「グローバル人材」や「学士力」、経済産業省が「社会人基礎力」という言葉を生み出し、大学生が卒業までに身につけなければいけない技量、力量として審議会等での報告書が提示され、それらの技量をあげるための方策が議論されている。しかし、文部科学省の「グローバル人材」は英語に直訳できない和製英語で、何をもってグローバル人材と言えるのか定義がさだまっていない。また「学士力」に示される技量が数多いために焦点を絞りにくい。さらに経産省の「社会人基礎力」は、大学卒業後に社会人となる学生に対する経済界からの要請から形成された技量＝基礎力であるとの感を否めない。これら「グローバル人材」や「学士力」、「社会人基礎力」と言った技量に関する議論に対して著者も、「数多い技量、力量を取り上げることで、大学で身につけるべき重要な要素は何かについての焦点がぼやけてしま」ったり、社会人基礎力は「基本的に会社や組織において役に立つ人材の資質を述べているという印象をぬぐえない」と批判的に記している。そして、大学生が大学で学ぶこととは「もう少し深いこと、根源的なことではないか」と提起し、大学生が大学で学ぶこととは、「教養」とそれを自ら高めてゆく力であると結論づける。

「グローバル人材」、「学士力」、「社会人基礎力」と、大学卒業までに身につけるよう示唆される技量や力量の造語が飛び交う昨今、あえて大学で身につけるべきは「教養」、そして大学で習得すべきは、インテグリティ、日本語力、向上心という三つの技量とのことを、「プリンストン流の教養」と

してわかりやすくシンプルに提示している点で、これまでの一連の学生たちのメッセージシリーズの本に続く貴重な一冊である。

本書の構成

本書は、1章で「大学生が身につけるべき3つの技量」を述べた後に、「ゆるぎない生活態度の習得」(2章)、「より深く根を下ろした人生へ」(3章)、「勉学の基本方針」(4章)で合計24のメッセージを記すという構成をとっている。

まず、著者は、「大学で学ぶべきことは、結論的にいえば「教養」とそれを自ら高めてゆく力である」とし、教養とは「目先の問題に対してすぐ直接的に役立つ技量ではなく、一般性の高い人間としての幅広い力」であり、具体的に、「理解力」(ものごとの道理が理解できるとともに的確に判断する力)、「伝達力」(自分の理解や意見を相手に的確に伝える力)、「社会力」(これらの力をもって社会

生活を営む力)という3つの基礎的な知的技量であると述べている。これら3つの技量は静態的であるが、それに加えて動態的な技量を示す向上心を加えた、それぞれの知的技量を著者の記述をもとに表にした(表1)。

次の2章から4章までに記されている24のメッセージは、タイトルを目次から表にした(表2)。第2章「ゆるぎない生活態度の習得」の15編は、著者が金融機関と教育機関での勤務経験および先人たちの知恵を蓄積した中から体得した教訓であり、著者自身の生活の支えとなっている考え方である。おもに著者が慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス在勤時に担当していた授業の冒頭のメッセージが基礎となって文章化されているという。第3章の「より深く根を下ろした人生へ」の5節は、明治学院大学国際学部在学中に、横浜キャンパスにおけるキリスト教礼拝を担当したときの講話をまとめたものである。礼拝の講話であるため、必然的に聖書の箇所を取り上げて構成されてい

表1 教養を表す4つの基礎的な知的技量と大学生が身につけるべき3つの技量

			特徴	大学生が身につけるべき3つの技量
静態的技量	理解力	ものごとの道理が理解できるとともに的確に判断する力	「論理的な思考力」と感性や感受性、直観力など感情や情緒が加わる非論理的な理解力のふたつの異質だが相互補完的な側面がある。	日本語力
	伝達力	自分の理解や意見を相手に的確に伝える力	コミュニケーション力、説得力、表現力、文章力、日本語や英語の語学力などを含む。国際的な場面では伝達力とともに前項の、相手の文化に配慮する理解力が求められる。	
	社会力	これらの力をもって社会生活を営む力	誠実さ、克己心、礼儀、徳に表現される、人間としてふさわしい対応ができる姿勢(倫理的な座標軸)をもっていること。具体的には社会ルールの理解、相手をおもいやる心など。	インテグリティ(誠実さ)
動態的技量	向上力	理解力、伝達力、社会力をさらに引き上げようとする態度	自分で積極的に学ぼうとすること、物事を納得するまで考える「探求心」などで、理解力、伝達力、社会力が静態的技量とすれば、向上力は動態的技量である。	向上心

岡部 p5-13 より齋藤が作成。

表 2 『大学生の品格』における 24 のメッセージ

	章	節		大学生が身につけるべき技量
メッセージ (一)	2 章 ゆるぎない生活態度の習得	1	時—すべてのことに時がある	インテグリティ
		2	夢—夢を持てば能力が高まる	向上心に関連
		3	着実—千里の道も一歩から始まる	向上心に関連
		4	苦境—苦境に陥るからこそ成長がある	向上心に関連
		5	失敗—失敗から教訓を得ればそれは成功である	向上心に関連
		6	勉強—勉強とは新しい理解方法を知ることである	向上心に関連
		7	時間—今日一日の充実に向けてエネルギーを注入する	インテグリティ
		8	緊急性はないが重要性の高いことに重点を置く	インテグリティ
		9	リスク—リスクを取らねば成長はなく充実感も生まれない	向上心に関連
		10	責任—自分の考えや行動に責任を持てば分別力が高まる	インテグリティ
		11	規律—事故を律すれば自分の人格が尊重でき品位を保てる	インテグリティ
		12	受容—他人の行動は受容し自分の行動を変えた方が心が落ち着く	向上心に関連
		13	誠実 (インテグリティ) —正直な言行によって信頼感が得られる	インテグリティ
		14	怒り—怒るよりも許す方が自分自身のためになる	向上心に関連
		15	感謝—感謝の気持ちは人生をより豊かにする	インテグリティ
メッセージ (二)	より深く根を下ろした人生へ	16	すべてのことに時がある	
		17	本当の喜びは与える喜び	
		18	心の平安, 勇気, 知恵	
		19	試験は呼びかけと受け止める	
		20	自分の内なる声を聴く	
メッセージ (三)	勉学の基本指針	21	研究—成功させる三つのポイント	日本語力
		22	論文—良い評価を受けるための三つのポイント	
		23	発表—効果的なパワーポイント活用の三つのポイント	
		24	入学式と卒業式—区切りに際して心すべきこと	

目次および「習得すべき技量と本章構成の対応」P47 より、齋藤が作成。

る。著者はキリスト教信者ではないとのことだが、明治学院大学はヘボン博士によって創立されたキリスト教主義の教育機関であり、明治学院大学の理念は『Do for others』(他者への貢献) であるこ

とを、キリスト教信者でなくても著者の職場であった明治学院大学の真髄を理解しようとし(理解力), 自身の経験から体得したことを加えたメッセージが、講話として礼拝参加者に聞かせるだけ

でなく、著書で伝えられている（伝達力）。まさに教養とはこのように深く相手を理解し、それを積極的に伝達することであるのだということを体現している。

第4章は、もうひとつの目標である「日本語力」を向上させるうえでのアドバイスである。大学生の基本的活動である勉学を中心に、「研究」、「論文」「発表」そして「入学式と卒業式」の4編が記されている。

「社会力」についての一考察

著者は、教養を表す4つの基礎的な知的技量「理解力」、「伝達力」、「社会力」、「向上力」のうち、「理解力」、「伝達力」、「社会力」は静態的技量、「向上力」は動態的技量と分類している。私は、ここで、静態的技量とされる「社会力」を特に取り上げて、考えてみたい。

著者によれば、社会力とは「人間として社会でいきっていくうえで養成される倫理的基準を幅広く身につけていること」、つまり「社会の基本ルールをよく理解しており、また相手を思いやる心をもっていること」や「人間としてふさわしい対応ができる姿勢（倫理的な座標軸）を常時保持し、それによって品位が感じられるような力量」（いずれも9ページ）であるという。しかし、社会の基本ルールの理解、相手を思いやる心、それらを基盤とした倫理的基準は、情報過多、マスコミの一方的な意図による報道の在り方、異なる人々を排除しようとする傾向など現実社会では、常になにが倫理的基準なのか、問い返し、議論する必要にせまられる。そのような時に、どのように物事を観察し、判断し、価値を見出し、議論し、合意形成を求めていくのかは、大学の教室での学びや先人たちの知恵を文献から読み解くという静的な態度だけでなく、フィールド（現場）での学びも大事となるであろう。たとえば、キャンパス外での気づきや発見から派生した体験的な学びのような動態的技量と、キャンパスに戻って現実課題を解決する方策を探す静態的技量、との体験的なフィールド学習への静から動、そして動から静へ

と、らせん型に技量を高めていく社会力が必要なのではないかと考える。

ひとつの事例を紹介したい。東日本大震災の被災地の津波のシーンや、避難所の光景、犠牲者の遺族の悲しみや、復興状況などが、テレビなどで断片的に報道されていた。震災から3年が過ぎて、そうした報道も以前に比べれば少なくなってきている。そのような状況の中、明治学院大学に留学しているカリフォルニア大学の学生たちと国際学部学生たち、そして引率教員の合計15名が、被災地である岩手県大槌町と釜石市鶴住居地区に2014年6月にスタディツアーとして訪問した。ツアー後に学生がコメントペーパーに記したのは、「3年経過してもっと復興していると考えていたのに、実際はそれほど進んでいなかった」、「仮設住宅の住民たちと話をしたが、ひとりひとりが生死に向き合う壮絶な人生を生きてきた人だとわかった」、「中央政府主導の復興計画は、現地の人々の意思を反映しているのだろうか」、「現地で発生している震災遺構を残すかどうかなどさまざまな対立が発生しているが、後世に被災の現実をどのように伝えたいのか」、「自分の地域が被災したらどうしたらよいか考えるきっかけになった」などだった。それらは、他人事としてではなく、自身が出逢った人々や地域から派生した課題としてとらえようとしている内容だった。ツアー中、「人命は尊い」という倫理的基準は共通であるが、その人命を守るために14メートルもの高さの防潮堤が必要か否か、多くの犠牲者が発生した遺構を残すか取り壊すか、社会的な合意（コンセンサス）やルールづくりは容易ではない現実を講義や議論を通して理解した。動的な体験から考察、そして静態的な技量を高めて分析や考察、議論をしていくことが、現実の社会で発生している具体的な課題に向き合う「社会力」を高めるのではないかと考える。

教養は非実利的な概念か

さらにもう1点、教養について考えてみたい。著者は1章で、逆説的な意味を含ませているので

あろうが、「教養は「非実利的な」概念」であると猪木の『大学の反省』を援用して述べている。そして、次のように続けている。「目先の問題に対してすぐ直接的に役立つ技量ではなく、一般性の高い人間としての幅広い力、それを教養ととらえたい」(5 ページ)。

実利的ではない教養を身につける大学教育に関して、現政権は、これまでの教育全般を批判的に捕えて、教育改革の必要性を主張している。

「日本では、みんな横並び、単線型の教育ばかりを行ってきました。小学校 6 年、中学校 3 年、高校 3 年の後、理系学生の半分以上が、工学部の研究室に入る。こればかりを繰り返してきたのです。

しかし、そうしたモノカルチャー型の高等教育では、斬新な発想は生まれません。

だからこそ、私は、教育改革を進めています。学術研究を深めるのではなく、もっと社会のニーズを見据えた、もっと実践的な、職業教育を行う。そうした新たな枠組みを、高等教育に取り込みたいと考えています。」⁽²⁾

これは安倍首相が、2014 年 5 月に開催された OECD 閣僚理事会で演説した内容の一部である。国の首長が考える教育改革によって大学が、「学術研究を深めるのではなく」、「社会のニーズを見据えた、もっと実践的な、直行教育を行う」職業教育を行う機関への改革を推進しようとしているならば、これまでの教養や深い専門的な知識を滋養する大学の存在意義は危ういものとなろう。

しかし、著者の岡部氏は、「社会のニーズを見据えた実践的な教育」を職業教育ではなく「課題解決型教育」として捉えるならば、これまでの学術研究姿勢を否定するものでは決してないことが、本書では明確に述べられている。少し長くなるが、引用しよう。

「グローバル化した社会で活動する場合、本当に意味をもってくるのは、一つは専門的な深い知識です。もう一つは、ものごとに対する考え方や基本的な態度である、と私は思います。(中略)ここで強調

しておきたいのは、自己の判断をしっかりと持つことができ、そして責任のある行動をとるには、まず自分についての自信が必要であり、それは結局、猛烈な勉強から生まれてくる以外にない、という点であります。諸君は「問題発見・解決型の教育」という言い方を耳にされたことがあるかと思います。これは従来の「知識伝授型教育」とは対照的な新しい教育方針であり、大学教育において近年重視されている新しい考え方です。

猛烈な勉強の必要性は、こうした新しい教育についても同様にあてはまりますが、一部には誤解があるようです。つまり、「これまでに蓄積された研究成果にかかわらずっていたのでは、現代の問題をとらえることはできない。これまでの蓄積はむしろ邪魔になりかねない」という見方がそれです。こうした理解は正しいとはいえない、と私は思います。なぜなら、本当に重要な問題をとらえるうえでは、これまでの先人たちが蓄積したものをまず猛烈に勉強し、自らの中に蓄積する、それがあるとき、いわば発火点に達するかたちでひらめきが生まれるというプロセス(セレンディビティ)を探る以外にはないからです」(213-214 ページ)。

学術研究を無視したり、軽視したりすれば、複雑化した現代の社会に横たわる諸問題の解決は困難になる。産業界であっても、異業種の参入がイノベーションを促進させている。新たな閃きを得るには、先人の蓄積もまた無視できないであろう。本書は深く、現代にも通じる「教養」を学生たちにもわかりやすい言葉で記しているのである。

さいごに

複雑化した現代社会の中で、大学で学ぶ意義は何だろう。社会に出る前のモラトリアムの時間ととらえる人もあるだろう。親密な人間関係を育み、生涯の友や伴侶を得る人もあるだろう。部活動やサークル活動で思い切り活動して新たな境地を切り開く人もいるだろう。その中で、そもそも大学は何をすところだったのか、大学で教養は身についたのか、また品格は備わったか。現役の大学

生、そして大学を卒業してからの自らの大学生活を振り返ってみたいとき、本書を読むことを薦めたい。また、大学生に関わる大学の教職員にも、大学生と向きあうことの重要性を原点に戻って考えることができる本書を薦めたい。

注

- (1) たとえば大学生に向けた『大学生へのメッセージ 遠く望んで道を拓こう』(慶應義塾大学出版会 2009年)、大学院生に向けた『大学院生へのメッセージ 未来創造への挑戦』(慶應義塾大学出版会 2011年)、『大学生の条件、大学教員の条件』(慶應義塾大学出版会 2002年)、「効果的なパワーポイント・プレゼンテーション 理論的基礎と実践的提案」明治学院大学『国際学研究』第41号 2012年など。
- (2) 首相官邸 HP「2014年5月6日 OECD 閣僚理事会 安倍内閣総理大臣基調演説」
http://www.kantei.go.jp/jp/96_abe/statement/2014/0506kichokoen.html (2014年5月31日アクセス)

<参考文献>

猪木武徳 (2009)『大学の反省』NTT 出版